



サッカー研究(1) : サッカーの世界制覇とその要因

加納, 哲也

(Citation)

神戸大学発達科学部研究紀要, 8(1):207-229

(Issue Date)

2000-09

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81000400>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81000400>



サッカー研究 (1) サッカーの世界制覇とその要因

加納哲也*

A Study of Association Football(Part1):
Domination of the World and a Primary Factor on Association Football

Tetsuya Kano

序論

スポーツを大衆化、国際化という視点から眺めるとき、サッカー^(注1)ほど地球規模で広がりを見せたスポーツは他には見当たらない。

もともとスポーツは上流階級の所産行為として発祥し、時代の経過と共に機械文明の発展にともない労働者の時間的余裕という現象が生じブルジョア主体のそれまでのスポーツの様相とは異なった経過をたどり普及・発展し現在に至っているのである。すなわち、19世紀後半から次第に大衆化の道を歩み、20世紀に入るとその傾向はさらに顕著なものとなった。

19世紀末1896年に復活した近代オリンピックにみられるごとく、スポーツの種類、それに関わる人の数、幅を拡大し国際化という新たな波を生んだ。そうした時代背景に登場し、たちまち世界中に広まった競技がサッカーということができる。

日本においては一般的にスポーツの最大のイベントはオリンピック大会であると捉えられがちであるが、世界の大多数の国々ではサッカーの世界選手権大会すなわちワールドカップがスポーツの最大のイベントとして捉えられているのが一般的である。地球上のほとんどの独立国が国際サッカー連盟に加盟するほど莫大な組織を形成している。情報化現象が進展する中、サッカー界で近年マスメディアの発展にともない政治、経済分野にも大きな影響をおよぼし、サッカーそのものがビジネスの対象となり、スポーツの純粋性の喪失が叫ばれるほどの盛況を示している。

しかし、そのサッカーもイギリスを発祥の母国としながら現在の形に統一されるまでにはかなりの時間を要したのである。すなわち現在ではサッカーとラグビーが全く別のスポーツのごとく行われているが、当初、それが混同した形で行われていたのがフットボールと呼ばれるものであった。それをイギリスではパブリックスクールの教育に導入し、統一ルールを制定することによって、ようやく近代スポーツとしての形を整えることになるのである。

1863年にロンドンにおいてイギリスのサッカーの統一組織であるサッカー協会(The Football Association)の設立により、それまで各地域独特の規則により行われていたフットボールが統一規則

*神戸大学発達科学部身体行動論

(2000年5月1日 受付)
(2000年6月9日 受理)

によって行われるようになった。さらに、その後1904年には国際サッカー連盟(Federation International de Football Association以下FIFAと記す)の創立により、約25年後に第1回世界選手権大会(World cup champions ship以下W杯と記す)が開催され、その後4年毎のこの大会は途中戦争のため中止になったことはあったものの、1998年にはフランスにおいて第16回大会が開催されたのである。この大会に日本はサッカーが移入されて以来約100年後に念願の世界サッカーの頂点であるW杯本大会への初出場を果たしたが、その実力は如何ともしがたく3戦3敗の成績で終わっている。W杯大会の出場国数枠は基本的には16カ国であったが、1982年(スペイン大会)から24カ国になり、さらにFIFAはサッカー普及・発展という趣旨から1998年(フランス大会)には出場枠を32カ国に拡大し未開・発展途上国の参加へ大きく道を開いたのである。

本稿ではサッカーの発祥から中世イギリスにおけるフットボールの概史を示すとともに、さらに近代スポーツとしてのアソシエーションフットボールすなわちサッカーが世界規模へ普及・発展した経過および伝達された地域連盟所属の伝統国と言われる各国のサッカーを取り巻く背景、特徴、実状を抽出し検討を加えるものである。そして最後に今日のようにサッカーが地球規模で世界制覇した要因に関する検討を加えようとするものである。

第1章 フットボールの近代化

ボールを使った遊びのルーツは古代文明の中にも見いだすことができるが、サッカーの原形と思われるボールゲームは世界にも数多く見られる。中国にもギリシャにも古代メキシコにもさまざまなボールゲームが存在した。しかし、現在の「サッカー」または「アソシエーション式フットボール」が生まれるまでイングランドで行われていたフットボールは村と村のケンカのようなものとして始まり、19世紀にパブリックスクール(私立中学)に教育の一環として取り入れられ、1863年にフットボール協会(The Football Association 以下FAと記す)の創立と同時に近代的なルールに統一されたスポーツとして成長したものである。

イギリスがサッカーの王国であると同時に一人の君主を抱く連合王国を形成しながら、サッカー界はそれぞれが独立した協会を持つ特殊な形態を維持している。すなわちイングランド、ウェールズ、スコットランド、北アイルランドの4協会がFIFAに加盟している。なかでもイングランドがサッカーの母国と言われるように、中世におけるイングランドではサッカーまたはアソシエーションフットボールの原形と思われるフットボールという遊びが行われていた。

この中世イングランドのフットボールはボールを持って相手陣内に運び込むことで勝負をつけることが基本であるが、その後、様々なルールに分化した。現代の各種フットボールはこの基本的発想をルーツとしたものでありサッカー、ラグビー、アメリカン・フットボール、カナディアン・フットボール、オーストラリアン・フットボール等に分化した。これら現代のフットボールはボールの形もそれを運ぶ手段もフィールドの形、大きさも多様であるが、共通しているのはいずれのゲームもボールをゴール枠に蹴り込んだり、投げ込んだり、あるいはエンドゾーンに運び込んだりする点である。

近代スポーツとしての形を整えた現在のフットボールに比して、粗野で野蛮な中世イングランドのフットボールはモップ(暴徒)・フットボールと呼ばれ、チームは村と村、都市と都市のように地理的でも、独身者と既婚者などのように社会的な区分けでも良かった。しかも人数制限があるわけではなく、グラウンドの広さが特定されているわけでもなく、家屋と言わず農地、牧草地あらゆる場所を使ってこの遊びは行われていたのである。

ボールを運ぶ方法も持って走る、投げる、蹴るなどどのような手段も許され、とにかく相手の陣地にボールを持ち込むことで勝敗を決し、それを阻止するには特別な規則があるわけでもなく、つかみ

サッカー研究 (1) サッカーの世界制覇とその要因

かかる、殴り倒す、蹴り倒すなど何でも許された。しかし、多くの負傷者や時には死者が出るほどになり国王が禁止令をしばしば出すこともあったがフットボールはなおも続けられた。

当時はスポーツというよりむしろ遊び、祭りの一種と考えられ、この種の特別な目的のない遊びないし祭りは世界各地に多く存在している。日本においても御神体を奪い合う裸祭り、スペインの牛追いなども同様な祭りとして考えることができる。

14世紀になるとフットボールと言う言葉が明瞭に出てくると同時に、フットボールが法律によって禁止されたスポーツという姿で記録に現れてくる。

即ち、1314年エドワード二世がロンドン市長に“市中において大きなフットボールの上で乱暴に押し合うことにより、騒音が生じている。また共有地の広場では、そのことによって神が禁じておられる多くの悪が生じている。われわれは国王の名において、今後このようなゲームを市中において行うことを禁ずる。違反者は投獄の罰を受けるであろう”という布告を出している。こうした布告にも拘わらずロンドンでは依然としてこの乱暴な競技は続けられ世間を騒がせたため、さらに1365年エドワード三世は聖職者がすべての世俗的競技に参加する事を禁じ、1年後には国防上の措置として“ロンドンの執行官に告ぐ。当市の身体強健なる全男子は祝祭日には、余暇ありて運動をなすに際しては、弓矢または石玉または太矢を用いるよう布告し……………石投げ、ログット（杭の一番近くにピンなどを投げた者が勝つ遊戯）および鉄輪投げ、ハンドボール、フットボールまたは他の何の価値もなき無益なる遊戯に手を出すことを禁止し、この禁制に違背せば投獄すべきこと”という布告を発し、特にフットボールはロンドンで禁止された。

エドワード三世の治世を通じてフットボールは農夫、職人、徒弟の間で人気を博し、しかも当時王国の防衛に欠くことのできなかった弓術の習練を妨げるまでになっていた。このように国防がフットボール禁止法の背後にある主要動機となり、さらに1388年リチャード二世も禁止令を繰り返した。

“……………されど、かかる使用人・労働者は弓矢を持ち、それを日曜日および祝祭日に用いるべく、ハンドボールたるとフットボールたるとを問わず、あらゆる球技を止め、鉄輪投げ・さいころ遊び・石投げと呼ばれる他の遊戯、またはこれに類する他の嘆かわしき遊戯を止むべきなり……………”

16世紀になると従来の市民の迷惑であるとか国防上の妨げになるという理由ではなく、宗教的な理由による反対運動が清教徒の間で起こった。そして日曜日に行われる代表的なスポーツであるフットボールを激しく非難したのである。すなわち、清教徒は日曜日は神によって定められた安息日であり、この日はひたすら礼拝を守り、全ての快樂から身を守るべき日であると信じていたから日曜日に行われるスポーツを容認することができなかったのである。しかし、フットボールを楽しむ徒弟、従僕、工人たちにとって週一度の休日であるから日曜日のスポーツを取りやめることには同意できなかった。

1618年にジェームス一世が「スポーツ宣言」(Declaration of Sport)を発令し、日曜日に行われるスポーツは悪いことではないという意志を表明したり、フットボールをはじめとするスポーツが人間性の発展にも健康にも有益なものと積極的にスポーツの価値を説く人々が現れてきた。リチャード・マルカスター(Richard Mulcaster)はフットボールの積極的な教育的価値を説いて盛んに奨励した。またジョン・ロックは『Some Thoughts Concerning Education』(1693)の中で、少年を楽しませる全てのゲームは、その發育に対して有益な影響を与えるという考えを示している。

その後イングランドでは学校にフットボールが持ち込まれたのであるが、閉鎖的であったため16世紀から18世紀の記録に乏しかった。しかし19世紀の初頭になると学校のフットボールがそれぞれの学校において主に競技場の形状によって異なる独自の形で行われていたことが卒業生の記したものによって明らかにされるようになった。

内容は今日のサッカーやラグビーの原形になるフットボールが行われていた。ゴールが何らかの形で設けられ、押し合いへし合いのマスフットボールであり、ボールを進める方法としてキックであっ

たり、またスクラムを組んでボールをその中に入れ、出たボールを蹴って攻める。さらにイートンのフィールドゲーム (Eton Field Game) ではハンドリングもなく戦法としては相手ゴールに向かってのドリブルだけである。そしてスクラムを4人で組み、得点はゴールにボールを蹴り入れた時に3点、ゴールラインを超えてボールをタッチダウンすると1点が与えられる。タッチダウンするとさらにスクラムの状態でもボールをゴールに進めるプレーが許され、ゴールにボールを入れるとさらに2点が加えられるといった特殊な形のフットボールが行われていた。

一般的にはイングランド古来のマスフットボールの基盤の上にたった標準的なフットボールが行われていた。すなわちプレーヤーの数に制限はなく、絶えずルーズスクラムが行われ、ボールを持って蹴ることは許されるが持って走ることはできないというタイプのものである。この種のフットボールの代表的なものはラグビー校のゲームである。その詳細はトーマス・ヒューズ (Thomas Hughes) の『トム・ブラウンの学校生活』 (Tom Brown's Schooldays) (1857) に記載されている。

当時パブリックスクールではクリケット、ボートなどのスポーツも行われていたが19世紀に入るとラグビー校を筆頭にハロー校、イートン校などの各校とも体育としてルール化されたフットボールを教育に取り入れたが、中世的モップ・フットボールは各地域において最小限の適当なルールで行われており、近代化しても当初は対外試合をする機運もまだなかったので、こうした状況は対外試合を行わない限り特に問題が生じることはなかった。

これは当然の成り行きで、当時は交通も未発達で標準時すら存在しない時代であり、スポーツのルールなどは当然のようにローカルなものとして考えられていた。近代化の進行とともに鉄道網の発達による地域間交流が盛んになり新聞、雑誌による情報の伝達が拡大することで学校やクラブ間で対外試合を行おうとする機運も高まってきた。

しかしフットボールは明文化されたルールを持った近代化的競技として行われるようになると、「ゴール」を奪うという目的が明確になり、選手あるいはチームは相手ゴールにボールを入れるという選手間で共通の目的を持ち、その目的を達成しようと手段を駆使しながら戦うゲームを行うようになった。

1863年にロンドンにフットボールが統括する組織としてフットボールアソシエーション (FA) が設立されたのであるが、その際ボールを運ぶ手段として手を使ってもよいとするか、足だけにするかという議論が生じた。そして1871年には手の使用を認めるグループがラグビー・フットボール協会 (Rugby Football Union) を設立したが、足だけを使うアソシエーションフットボールとここで別の道を歩むことになった。

現在、一部でフットボールのことをサッカーと言う呼称を使うが、これはアソシエーションフットボールの俗称であり、Associationの第1音節「AS」を省略し、第2音節の「SOC」の最後の子音をダブって「SOCC」とし、さらに「ER」を加えて「SOCCER」を作り出したと言われている。

このように近代フットボールは、イギリスが産業革命を成功させ世界の工場として君臨するようになった19世紀中葉に成立したものであり、イギリスの産業革命を成し遂げたジェントルマン達とジェントルマンたらんとする企業家達の努力の結晶であった。

産業革命により資本家と企業家という新たな階級が生まれ、利潤の追求、そのための手段と目的の意識的峻別など、目的のための資本投下などに関する手段の適切な組み合わせを選ぶことが資本主義の下での利潤追求になったのである。企業家のもつ合目的な思考形態はジェントルマンのそれと共通するものがあつた。ジェントルマンは土地を所有し、企業家は生産財を所有するという違いはあつたものの、どちらも自らが所有する資本財をいかに適切に組み合わせで投資して、そこから最大限の利潤を生むかを考えていた人々なのである。企業家達は上流階級に参入するために子弟にパブリックスクールでの教育を重要視したのである。

サッカー研究 (1) サッカーの世界制覇とその要因

対抗戦を行うことになれば当然共通のルールが必要になることは言うまでもないことであり、このことはいずれ全国選手権大会開催の願いが込められていたことに違いなかった。

このような全国標準化現象は、資本主義全盛の時代精神の表現でもあり、その当時、イギリスはビクトリア女王時代で経済的に絶頂期に当たり、資本家と労働者という図式を生み、労働者は労働時間あるいは出来高により給料を受け取り、その労働のための規律や価値観はまさに近代スポーツとして確立されたフットボール精神と共通のものがあつた。

資本家にしてみれば労働者を訓練し、利潤追求のためには高い規律を保った健康な労働者を育成することが、質の高い労働力を確保し、結果的に生産性を向上させ資本家階級の利益になることに着目し、労働者がフットボールをプレーし観戦する環境の整備に資本の一部をさいた。

このように19世紀に成立した近代フットボールのうち手でボールを扱うことを認めたラグビーフットボールは、上流階級つまりパブリックスクールや大学出身者に愛好されたが、その後アソシエーションフットボールすなわちサッカーは労働者階級のスポーツとして発展した。

第2章 世界的規模への普及の実態

フットボールはイギリスの軍人、船員、植民者などによりイギリスと交流の活発な各国の貿易港に移植されていった。フットボールが外来のスポーツとして渡った土地では、その国の国民が自己同一化の契機として民族的対立や宗教紛争であったり、階級的対立であったと考えることができる。フットボールはそれらの土着的対立を一方向性に同一化することによってチームに対する熱狂的支持状態を生み出したのである。

現在でも世界的にサッカーの盛んな地域、場所としてイタリアではジェノヴァであり、スペインではバルセロナ、南米では食肉や小麦の輸出でイギリスと密接な貿易関係のあつたアルゼンチンの貿易窓口であるブエノスアイレス、ブラジルではリオデジャネイロ、サントスがこうした交流のあつた港街としてあげることができる。これらの都市では現在でもサッカーは非常に熱狂的に行われている。

さらにヨーロッパや南米以外のアフリカ、アジアの植民地にもフットボールは伝播した。イギリスは飛び石のように港を支配し、そこを拠点に海外航路を確保する植民地政策をとっていた。地中海からエジプト（スエズ運河）を通って紅海に、さらにアデン（イエメン）を通るルート、さらにバクダット（イラク）を通ってペルシャ湾に面したドバイ（アラブ首長国連邦）等を通るルート。こうしたルートを辿ってインド洋へ抜け、そしてインドでボンベイやカルカッタなどの港を確保し、さらに植民地はシンガポールに続きイギリスの影響力は中国の香港、広東（広州）、上海そして日本の長崎、横浜へと伸びたのである。このようにして世界に君臨するイギリスの船員や鉄道技師達はサッカーを持って世界各地に散り、地球の隅々にまでこの新しい競技を広めたのである。しかも多くの民族はボールを足で操って遊ぶ競技を伝統的に持っていたことも影響し、瞬く間にサッカーが世界的に最愛の競技として定着していったのである。

さらに、表1に示すように1904年に設立された世界のサッカーを統括する組織であるFIFAへの加盟国も各地域とも年代を追って増加し、現在では国際連盟への加盟国を上回るほどの普及で世界各国のサッカーに対する関心の高さを示し、世界の人々にいかに愛されているスポーツであるかを理解することができる。

現在、サッカーは各国の連盟に登録されている競技人口だけでもトータル的には約2億人の選手がいると言われている。さらにそれ以外に未登録のサッカーに関わる人々をあげるならば恐らく天文学的数字を示すことになるかと推察される。

表1. 国際サッカー連盟(FIFA)加盟国数の推移

	1904 ～1913	1919 ～1938	1945 ～1959	1960 ～1969	1970 ～1979	1980 ～1989	1990 ～現在	合計
欧州サッカー連盟 (UEFA)	20	12	4	0	1	2	12	51
南米サッカー連盟 (CONMEBO)	2	7	1	0	0	0	0	10
北中米・カリブ海サッカー連盟 (CONCACAF)	2	8	4	7	2	4	6	33
アジアサッカー連盟 (AFC)	0	6	18	4	5	3	7	43
オセアニアサッカー連盟 (OFC)	0	0	1	3	0	3	3	10
アフリカサッカー連盟 (CAF)	0	1	6	29	5	7	3	51
合計	24	34	34	43	13	19	31	198

注：1904年～1913年 FIFA創設から第一次世界大戦開戦まで

1919年～1938年 第一次世界大戦終結後より第二次世界大戦開戦まで

すなわち、ヨーロッパから始まった近代サッカーの伝播の歴史は、FIFA加盟協会数（加盟国数）の推移によっても把握することができる。FIFAの創立から第一次世界大戦前の時代は多くのアジア、オセアニア、アフリカ地域の国々はヨーロッパ列強諸国の植民地であったため国家代表として地域サッカー協会およびFIFAに加盟することはできなかった。南米もアルゼンチンとチリ以外は第一次世界大戦以後に加盟しているのである。

第一次世界大戦終結後、ヨーロッパ地域で独立した国々の加盟が相次ぐとともに、近代国家としてアジアのタイ、フィリピン、日本、中国、レバノン、シリアや北中米・カリブ海地域からの加盟国が増えることになる。さらにアフリカ地域からエジプトが加盟している。

第二次世界大戦終結後は、帝国主義の崩壊により特にアジア地域では独立が相次ぎ加盟国が増加する。これに呼応するように一部アフリカでもその兆候が見え始め1960年代はアフリカの時代となり、独立国家として29協会があらたに加盟した。またカリブ海諸国からも多くの加盟があった。

中東の産油国が加盟したのも石油化学工業が発達した60年代である。逆に60年代以降に加盟の見られないのは南米地域であるが、これは国家の分裂などが起こらず比較的安定した状態が保たれていることを示していると言える。

1970、80年代は地理的に小国や諸島の国々が加盟することになるのであるが90年代にはソビエト連邦崩壊の影響でヨーロッパ連盟の加盟国数が急激に増加する。

このようにFIFAの加盟協会数を地域別に比較してみると、その時代の地域社会の安定性や経済状態の変化に大きく左右されていることが見えてくる。このことは、サッカーがその地域、国々の人々の環境要因により普及、発展するという背景を持っていることを示している。

こうして世界各地、各国にサッカーは広がったが、サッカーの内容は各地域はもちろんのこと、それぞれの国によってもかなり異なっていることは言うまでもない。それはサッカーが人間の持つ全知全能を必要とする全人格的スポーツと言えるからである。即ち、サッカーに対する考え方、「哲学」

とも言えるようなものは、それぞれの国の異なる環境の影響を受けているのである。

具体的には、サッカー選手には冷静な選手、情熱的な選手、感情的な選手、理論的な選手などいろいろなタイプの選手が存在し、ゲームではそれらの選手の個性、人格が明確に現れるからである。したがって、各国のサッカーには民族的特徴、さらにその国の文化まで反映しているともいうことができる。

第3章 国際サッカー連盟の創立・ワールドカップ大会の誕生

世界が近代帝国主義のシステムで動いていたこの時代にヨーロッパや南米以外にも植民地政策との関係でサッカーが浸透し、当時の国家間の競争意識を背景にサッカーの世界一を決める国際サッカー大会すなわちワールドカップ（世界選手権）大会開催の構想は早くから存在していた。

1898年頃からすでに異例ではあるが国際試合は行われるようになっており、チームが所属する各国サッカー協会間では各種の関係が結ばれつつあった。試合の場所、日時を決めるために手紙の交換、試合の度に直接親交を結んだりした。こうした漠然とした友好関係を拡大し、常設の連絡機構を設け、規定や協約を定めて一定の計画を企画した方が得策と考えついたが、これとて全世界の協調にはほど遠いもので、協約のおよぶ範囲もヨーロッパ大陸を超えるものではなかった。いづれにしても国際サッカー連盟設立の主要な理由は国際大会開催という共通の願いであったことは確かである。

このような背景のもと、ともあれ1904年にFIFA がフランス・パリに設立された。初代会長ロベール・ゲラン（フランス・スポーツ協会連合：会長在任1902年～1906年）の提案によってFIFAのみが国際選手権大会開催の権利を有することや初の世界選手権大会の即時開催を決定し、オランダ・サッカー協会のヒルシュマンに大会規約案の起草を一任した。

このことから、連盟の設立は国際的な選手権大会の開催を最重要事項として考えていたことが伺い知れる。現在は全世界を6地域に分割し、地域連盟への加盟を通じて各国がFIFAに加盟するというシステムが確立されている。

次に示すこの時の大会規約の概略は、現在のワールドカップ史を語る時、非常に重要な思考形態を留めるものとして考えられている。

- 1：国際サッカー連盟加入の各国サッカー協会所属の国内チャンピオンチームによる選手権大会を、毎年シーズン終了後に開催する。
- 2：毎年の総会で、翌年の選手権大会を主催する協会を指定する。
- 3：選手権大会は予選勝ち抜き方式で行い、大会日程は連盟事務局が取り決める。
- 4：参加チームの旅費は主催協会が負担する。
- 5：大会運営費は主催協会が負担する。
- 6：純益はチームを派遣した協会間で分配する。
- 7：優勝チームには連盟が金メダルを授与する。
- 8：各チームは、その国旗に従い、クラブに所属する外国人を含めない。

また、大会規約の財政規定には次の項で補完されていた。

- (A) 大会に参加する協会が派遣チームの旅費、滞在費を負担する。
- (B) 主催協会がすべての運営費を負担する。
- (C) 準決勝、決勝戦の純益は以下のように分配する。

この規約をみても、当初考えられていたのは、現在ヨーロッパで行われているヨーロッパチャンピオンズ・カップ(Uefa Champions Cup)のような各国のクラブチャンピオンによるトーナメント方式でありナショナルチームによる真の世界選手権を意図していなかったことが分かる。

しかし、この70年以上も以前の規約には、現在のワールドカップ大会開催の考え方と基本的に共通する部分がすでに見えていることに気づく。

例えば、開催時期もシーズン終了後とあるのは、現在ワールドカップ大会が毎回6月から7月に開催されている。このことは各国の国内リーグ戦の終了後にあたるのである。さらに大会運営方法でも予選、勝ち抜き方式、代表チームに外国人を含めない、また財政規定などは現在のW杯に生かされている。

実際には熱狂的に決定されたこの規約に基づくヨーロッパ対抗試合も、エントリーが全くなく開催を断念せざるを得なかった。原因として創立から1年しか経過していない連盟は各国協会に対して十分な精神的影響力を持たなかったと考えることができる。

1906年開催のベルリンにおけるFIFA総会で委員長のウールフォール氏(イングランド)は“連盟はまだ国際的な選手権大会を創設するだけの安定した基盤を築いていない。この創設を検討するにあたって、先ず第一に、各国に存在する協会は一つだけということ、はっきりさせる必要がある。さらに参加チームが統一ルールを守るということを、明確にしなければならない”と述べている。

40年以上の経験によって組織化されたイギリスは別として、その当時、ヨーロッパの大半の国々でサッカーは依然マイナーな状態にあっただろうと考えることができる。事実、この総会以来、国際選手権大会の問題は話題にもあがらず私的な会談にしか過ぎなかった。

現在では「ワールドカップ」の名称はサッカーの世界ナンバーワンを決定する大会である。各種スポーツに関する国際大会においてもサッカーがこの呼称に関しては一般的に最優先的に把握されていると考えることができるが、名称としてFIFAに加盟している各国サッカー協会を代表するチームが対戦する大規模な大会に「世界選手権大会」以外の名称がつくとは考えられなかった。

ジュール・リメ著(Jules Rimet 1873~1956 フランス)の『ワールドカップの回想』によれば“1928年のアムステルダム総会の議事録をみると、初めて、かなり漠然とした選手権大会を定義しながら「世界選手権」という名称を使わないようにしているように思われる点がある。しかし、それに代わる他の名称は提示していない。この総会に提出された草案には「総会は、加盟国協会の全チームが参加できる大会を1930年に開催することを決定する」とある。大会の開催条件を検討して総会に報告することを委任された委員会の委員たちが、その原則で合意したものの、大会の運営や、名称を「世界選手権大会」とするか、あるいは「ワールドカップ」にするかで合意に達しなかったことは当然考えられる。私の記憶もそうだったように思う。このため、よくあることだが、委員会は将来については留保し、総会に決定を委ねる妥協案を選んだのだろう。ともあれ、全大陸のチームが4年ごとに集うこの大会が、公認された戸籍上の身分として「ワールドカップ」と呼ばれたことに疑いの余地はない。このあと、1930年ウルグアイ、1934年イタリア、1950年ブラジル大会では、なお世界選手権大会の名称がついたが、これは大会を主催したそれぞれの国の協会が、大衆を引きつけるには、スポーツ関係者にのみ知られている「カップ」よりも「世界選手権大会」の方がより大きく、派手で、ぴったりした名称だと判断したからだと私には思える。だが、例外もあったことを強調しておきたい。1938年のフランス大会では慣例通り「カップ」の名称を使ったが、試合の人気には全く響かなかった”となっている。

ジュール・リメはFIFA第3代目会長として1920年から1954年まで34年間在任し、歴代会長としても最長の期間を勤めた。その間1946年ルクセンブルク総会においてFIFA会長在任25周年を記念して、ワールドカップを以後「ジュール・リメ杯」と称することが決定されたが、その後、相変わらず世界選手権大会あるいはワールドカップの二つの名称を無差別に使い続け「ジュール・リメ杯」の名称は

無視されがちだった。その後、世界選手権大会のサブタイトルに「ジュール・リメ杯」と呼ばれたこともあったが、現在では大会内容は世界選手権大会でありながら「ワールドカップ」と呼ばれるのが一般的である。

FIFA設立当初はサッカーの母国イギリスの4協会がFIFAに加盟していなかったり、オリンピック大会とのプロ、アマ規定問題などが障害になったり、さらに第一次世界大戦の影響でそれまで歴代FIFA会長が努力したが第1回大会が開催されるまでには、なお相当の時間を要した。

FIFA第3代目会長ジュール・リメは1924年のパリ・オリンピックで南米の小国ウルグアイが優勝したことにより世界のサッカーに南米という大きな勢力があることを察知し、世界選手権大会開催の期が熟したと判断した。1928年アムステルダムでのFIFA総会においてフランス・サッカー協会事務総長であるアンリ・ドロネー(Henri Delauney)が1930年に第1回サッカー世界選手権大会(Soccer World Cup以下W杯と記す)の開催を提案し決定したものである。

開催地として数国が立候補したがウルグアイの参加チーム役員、選手の旅費、滞在費を負担するという条件が最大の決定要因となり、第1回大会の開催国として独立百周年のウルグアイが選ばれたのである。しかし、ヨーロッパ地域各国から南米までは当時、現在のように航空機が発達していたわけでもなく、船を使えば往復1ヶ月もかかるほど交通事情が悪かった。

そんな事情で、この第1回大会にはFIFA会長ジュール・リメの努力によりヨーロッパからはフランス、ベルギー、ユーゴスラビア、ルーマニアの4カ国が参加し、大会は予選なしの13カ国で開催された。結果的にはFIFAにとっても、開催国ウルグワイにとっても政治的、経済的な面からも大成功を治めた。

その後、この大会は4年に一度オリンピックの中間年に開催されるようになったが、世界は大不況から第2次世界大戦へと向かう暗い時代になりつつあった。スポーツの世界でもこうした社会情勢から逃れることはできず、1934年大会(イタリア)はムッソリーニの権勢を世界に誇示する大会となり、1938年大会(フランス)では予選を勝ち抜いた優勝候補の一角とまで言われたオーストリアが大会の2カ月前にナチス・ドイツに併合され不参加となり、選手はドイツ代表として出場するという事件もあった。第2次世界大戦による2回の中断をはさんで1950年に再開され、舞台も欧州から南米・ブラジルでの開催となった。

南米とりわけブラジルはヨーロッパ人が想像もできないほどのサッカー大国に成長していた。しかし、現在サッカー大国と言われる南米サッカーといえども、サッカーを紹介し指導したのはイギリス人であった。

南米サッカー連盟加盟国(Confederacion Sudamericana de Futbol 以下CONMEBOLと記す)の10カ国中、ブラジルは元ポルトガルの植民地、他の9カ国はいずれもスペインの植民地だった。このように、かつては大部分がスペインの植民地だった南米だが19世紀末にはイギリスとの貿易が盛んだった。このような経緯によりイギリス人が南米の各地にサッカーを持ち込んだのであり、中でも20世紀初めにヨーロッパとの貿易で最も栄えていたのが大河ラプラタ兩岸に位置するアルゼンチンとウルグアイであり、南米のサッカーはこの両国で最初に急速に発展した。これより少し遅れてブラジルが数多くの黒人選手を登場させ、その身体能力の高さによる攻撃力と個人技によって急激に強化され、第二次世界大戦後はブラジルが世界のサッカーをリードすることになるのである。

ヨーロッパから地域的にも遠く離れていたこともあり発展にも独特のものがあつた。すなわち第1回W杯でウルグアイがヨーロッパ人を驚嘆させた個人技術の高度さだった。

この1930年代の世界大恐慌時代に、ヨーロッパで最も伸びた産業は各国のプロサッカーだと言われている。娯楽の少なかった時代の人々は唯一の楽しみを求めてスタジアムに足を運び、第2次世界大戦後には、さらに巨大化してサッカーのブームを生み出し、やがてサッカー産業と言われるまでに成

長したのである。

我が国では世界最大のスポーツイベントとして、一般的にはオリンピック大会が捉えられる傾向があることを既に述べたが、世界的にはワールドカップがスポーツの最大の祭典として考えられているのが一般的である。

ワールドカップ出場資格はFIFAに加盟する各国協会の代表チームすなわち最強のナショナルチームであり、サッカーの場合、平常は外国人選手も含んだ「クラブ」単位で国内のリーグ、カップ戦、国際試合等が行われているが、代表チームはその国に国籍を有する選手で編成されなければならない。このようにして作られたナショナルチームの世界チャンピオンを決めるのがワールドカップ本大会（決勝大会）なのである。

しかし、この加盟国全てがワールドカップに参加するわけではなく、4年に一度行われる大会は「決勝大会」と呼ばれ、FIFAは表2に示すとおり6つの地域別連盟によりそれぞれ決勝大会出場枠数が決められている。そして予選を含めた出場チーム数は表3に示したとおりであり、年代により異なるが決勝大会出場可能チーム数も制限されている。第16回大会（フランス）から32代表チームと増枠し各地域に与えられた枠数により予選が行われ代表国を決定するのである。年を経るにしたがい予選出場国も増加し、1998年フランス大会では174カ国の多くを数えた。

地球上の全ての人類、全ての人々がFIFAの統ルールに基づき、同じ広さのフィールドで、同じ規格のボールを使い、同じ大きさのゴールをめぐるプレーしているということになる。このあたりがサッカーが世界共通の言語と言われる所以と考えられるが、それでもサッカーがスポーツとして登場してから全世界共通のルールに基づいて競技が行われるようになるまでにはかなりの年月を要したことになる。

1990年の第14回大会（イタリア）には、各地域の予選を勝ち抜いた代表24カ国が出場し、約1カ月間に52試合が行われた。FIFAの発表によれば、その間の観客動員数は250万人、また世界中のテレビ視聴者数はのべ267億人と言われている。即ち、世界の総人口が約50億人であるから大会期間中に全人類が一人あたり5試合を観戦したことになる。

表2. 大陸別ワールドカップ出場枠

	ヨーロッパ	南アフリカ	アフリカ	アジア	北中米	オセアニア	合計
1966	9+H	3+C	1/3	1/3	1	1/3	16
1970	8+C	3	1	1/2	1+H	1/2	16
1974	8+1/2+H	2+1/2+C	1	1/2	1	1/2	16
1978	8+1/2+C	2+1/2+H	1	1/2	1	1/2	16
1982	13+H	3+C	2	2/2	2	2/2	24
1986	12+1/2+C	4	2	2	1+H	1/2	24
1990	13+H	2+1/2+C	2	2	2	1/2	24
1994	12+C	3+1/3	3	2	1+1/3+H	1/3	24
1998	14+H	4+C	5	3+1/2	3	1/2	32

注：H：開催国 (HOST)
 C：前回優勝国 (CHAMPION)
 1/2 2大陸でプレーオフ
 1/3 3大陸でプレーオフ
 2/2 2大陸で2代表

表 3. W杯本大会の出場国数

	開催国	出場国	出場枠	試合数
1930年	ウルグアイ	13	13	18
1934年	イタリア	32	16	17
1938年	フランス	36	15	18
1950年	ブラジル	32	13	22
1954年	スイス	37	16	26
1958年	スウェーデン	53	16	35
1962年	チリ	52	16	32
1966年	イングランド	70	16	32
1970年	メキシコ	69	16	32
1974年	西ドイツ	98	16	38
1978年	アルゼンチン	99	16	38
1982年	スペイン	108	24	52
1986年	メキシコ	119	24	52
1990年	イタリア	112	24	52
1994年	アメリカ	144	24	52
1998年	フランス	174	32	64

全世界において盛んであるサッカーも、ワールドカップ規模になると特に最近では本大会に出場することは至難の業であり、まず地域予選を2年ほどかけて勝ち抜き、各国は地域別代表権を獲得することを最大の目標としている。

また、FIFAの管轄するサッカーに関する世界大会はワールドカップを頂点に6種類の世界選手権があり、やや特殊な形ではあるがオリンピック大会（サッカー種目）もそのうちの一つである。オリンピック大会は、国際オリンピック委員会（IOC）の主催する大会でありながら実施はFIFAが行っている。

また、1974年に会長に選出されたジョアン・アベランジェ（ブラジル）は、アジア、アフリカなどサッカー後進地域の振興の第一弾として1977年より2年に一度の「ワールドユース選手権大会」（World Youth Champions ship）を開催した。さらに1985年には「16歳未満の世界選手権」（Under-16Age 以下U-16と記す）が行われ、1991年には現行のU-17大会となった。さらに「室内世界選手権」や「女子世界選手権」も統括している。

オリンピック大会は当初アマチュア資格の大会であり、東ヨーロッパの「ステートアマ」つまり実質的にはプロでありながら国の政策上スポーツのプロを認めない国が圧倒的に有利であったが、1984年オリンピック（ロスアンゼルス）大会から出場資格を改め、さらに1992年バルセロナ大会からはサッカー選手であればプロ、アマ関係なく23歳未満の大会となり、その後1996年オリンピック（アトランタ）大会には人数制限はあるもののオーバーエイジ選手（Over Age player）の出場も認められるようになった。しかし、実質的には23歳以下の世界選手権大会と言うことができ、必ずしも各国協会を代表するいわゆるフル代表とは異なっている。

オリンピック大会においても地域代表を選ぶには予選を行わなければならない、それはワールドカップと同様であり、日本の場合、1964年のオリンピック（東京）大会の場合は開催国のため自動的に出場権が与えられたものの、その他のオリンピック大会にはやはりアジア地域としての代表予選が行われ、予選を勝ち抜いて初めてその地域の代表になり得るのである。このようにサッカーはW杯を中心

に世界的普及をしたスポーツであり、地域予選を含めると常に地球上のどこかで代表チーム同士の対抗戦が行われていると言っても過言ではない。

第4章： 地域大陸別特徴

(1) ヨーロッパサッカー連盟(Union des Associations Européennes de Football : UEFA)

イギリスで生まれたサッカーはいち早くヨーロッパ各国に伝えられたことは言うまでもない。歴史と伝統によって育まれたヨーロッパのサッカーの強さや層の厚さは現在でも世界で群を抜いている。従来ヨーロッパではドイツ、イタリアのごとく幾つもの国や都市国家に分かれていたが、全国統一されたのが19世紀後半だった。すなわち一つの民族が作る国民国家という形を作り上げた。しかし、国民国家とはいうものの現実的にはこれら国民国家の内部にも自治を求める少数民族はいくらでも存在し、イギリスの中でもスコットランドは自治を求めており、スペインのカタルーニャ人は自治政府を樹立している。

しかし、20世紀後半になると国民国家の枠を超えた超国家的なヨーロッパ連合(EU)という機関がその権限を強めて来ることになるのである。当初は経済共同体(EEC)だったが、現在は政治的な存在に成長し、1999年には共通通貨「ユーロ」を発行した。現在ではヨーロッパ大陸では国を超えたヨーロッパ人という意識が生まれつつある。

1904年に創立したFIFAは国民国家の枠組みに準じて組織されている。国家ごとに一つのサッカー協会が設置され、その国籍を有する選手によって代表チームが編成されW杯やヨーロッパ選手権を争うのである。しかもクラブチームにも外国籍の選手数を制限する規則があった。ところが1995年にEU加盟国に国籍を持つ選手は外国人選手規制の対象にはならないというボスマン判決^(注2)があり、その後イタリアやスペインのビッグクラブでは選手の半数以上がEUを含む外国籍の選手というクラブさえ出現している。このように国際的移籍が増幅すれば今後各国代表チームの戦力の低下さえみられるような現象が現れることも起こりうるのである。

世界各地で広くサッカーが行われているが、中世の伝統に基づいたイングランドのサッカーは、近代スポーツとしての体裁を整えた後に輸入した他のヨーロッパ大陸諸国とは違った文化的伝統を残している。その環境を反映するように雨の多い気候と恵まれた体力を生かし激しいボディコンタクトはあっても、かつてのモップフットボールに代表されるようなプレーはフェアなプレーと化し、やや直線の嫌いはあるもののロングパスを多用したプレーを得意とし、攻撃的でエキサイティングなサッカーが特徴である。それに反してスコットランドは形態的にそれほど恵まれないという特徴を生かしショートパスを主体にしたサッカーを行う。

1863年にロンドンにおいて世界初のフットボール協会が設立された。ここで制定された全国統一ルールによってアソシエーション式フットボールつまりサッカーというスポーツが誕生し、1872年にはイングランド出身選手とスコットランド出身選手の世界サッカー史上最初の国際試合が行われている。

また、同じヨーロッパでもドイツは忠実な動きと最後まで勝負にこだわるいわゆるゲルマン魂が特徴であり、スタミナと運動量を生かしてスペースに走り込むことを繰り返すような試合運びが主体で、いかに効率的に相手ゴールにボールを蹴り込むかを考えるのがドイツのサッカーになっている。

また、イタリアでは国民性に反するような「カテナッチョ」と言われる守備中心のサッカーが発展した。この戦術はゴール前に厚い守備網を敷き相手の攻撃を無得点に抑え、そこからボールを奪ったらカウンター攻撃をかけることによって最少得点で勝つ。勝てないにしても負けないことを目指す作戦なのである。イタリアは19世紀後半になってようやく統一されたが、それまで北部では多くの都市国家などが独立の地位を保ち、また南部ではローマ法王庁やナポリ王国があり相互に戦争を繰り返し

サッカー研究(1) サッカーの世界制覇とその要因

ていたという歴史を持ち、それがそのままかつての都市国家同士の戦争の代わりをしているのが現代のイタリアのサッカーリーグなのである。したがってイタリアではすべての人々がサッカーの結果に一喜一憂し興味を持っており、それだけ盛んであると言える。

次に1998年W杯優勝のフランスを取りあげておかねばならない。1980年代のフランスのサッカーは「シャンパンサッカー」と言われるほど技巧派選手の揃ったスペクタクルなサッカーが主体だった。ショートパスをリズムカルにつなぎ、そのリズムを観戦するだけで堪能する芸術性があった。しかし勝敗の面では必ずしもフランスは世界の中で頂点には立つことができなかった。W杯出場は10回を数えるが1998年地元での開催まで優勝は待たされたのである。

数年前までは世界のサッカーではイタリアのセリエAが世界最高のリーグと言われていたが、今日ではイタリアの一極集中は弱まっている。すなわちスペインが参入してきたからである。EU加盟国の国籍を有する選手を外国人枠で制限することが解除されて以来、さらにTVの普及によるテレビマネーの流入により豊富な資金を使って各国のビッグクラブが有名選手を買い集め、スペインでも世界的な選手が多数リーグに加わり今では世界最高のリーグとさえ言うことができる。

こうしてクラブ運営は成功していると言えるが、スペイン代表チームの戦績は必ずしも芳しくはなく、W杯では常に中堅クラスに甘んじているのである。これは他のヨーロッパの国々に比べると勝負にこだわらないということが上げられる。さらにスペイン独特の、国を構成する地方性の問題がある。スペインのあるイベリア半島は8世紀の初めにイスラム教徒の支配下に入り、その後ピレネー山脈の麓に残った幾つかのキリスト教王国がイスラム王国を南部に追いやり、結局15世紀末になって全土を奪回したという歴史を持つ。その過程で北部海岸アストゥリアス地方に起こったカステージャ王国の女王イサベルと地中海を支配していたアラゴン王国の国王フェルナンドの結婚と言う形で両国が合同してスペインとなったのである。しかし、最後までイスラム勢力のグラナダ王国の支配下にあった南部アンダルシア、バルセロナを中心としたカタルーニャあるいは全く別の民族が住むバスク地方など各地方はそれぞれの文化を持ったままであり、スペインという国はこうした地方が組み合わせられたパズルのようなものである。そのパズルの一片がポルトガルという独立の存在として残っている。

このように他のヨーロッパ諸国とはピレネー山脈で隔てられたイベリア半島に住むスペイン人にとってスペイン人としての国民的意識よりカステージャ人、カタルーニャ人としての意識、あるいは各都市の市民意識の方が強いのかも知れない。このような背景を持つスペインはナショナリズムの欠如がサッカー試合の面でも大きく影響しているのではないだろうかと考えられる。

最も近代的なサッカーを1970年代から行っていたのがオランダである。当時としては全く斬新なサッカーを構築し、「ローテーションサッカー」とまで言われた。すなわちその当時すでに現代サッカーのごとく選手は一定のポジションに囚われることなくどこからでも攻め、また空白のスペースを他のプレーヤーがカバーするというオールラウンドなサッカーを展開していたのである。オランダがW杯においても常に上位にランクされるのは若手選手の育成法に優れているからだと言われている。

(2) 南米サッカー連盟(Confederation Sudamericana de Futbol: CONMEBOL)

南米10カ国中ブラジルは元ポルトガル植民地であり、他の9カ国もいずれもスペイン領であった。南米は19世紀にはイギリスとの貿易が盛んで、貿易に従事していたイギリス人が南米各地にサッカーを持ち込んだが、ヨーロッパとは遠く離れていたためサッカーは独自の発展を遂げることになる。そして、イタリア、スペインなどヨーロッパのラテン系と同様に世界でも最もサッカーの盛んな所である。かつてはエルサルバドルとホンジュラスがW杯予選を契機に戦争を起こしたほどサッカーに対しては熱狂的である。

過去W杯で4回の優勝経験のあるブラジルがやはり南米では飛び抜けた力を持っていると言える。

ブラジルの最大の魅力は攻撃力と個人技である。ブラジルのサッカー文化を生み出した背景には20世紀前半に世界に先駆けて大量の黒人がサッカーに参加したことである。

ブラジルでは、ヨーロッパ系、アフリカ系、東洋系、アラブ系、そして先住民族とまさに世界中のあらゆる人種を見ることができる。このような状況の下に現在のブラジル人が形成されたのである。ブラジルのサッカーは当初は上流階級やヨーロッパ留学経験のあるエリートがプレーしており、その後、下層階級出身者もプレーするようになった。下層階級の参加とはブラジルにおいては人種的構成の変化を意味することであり、次第に黒人やムラート（黒人と白人の混血）が参加するようになったのであるが、最近のブラジルでは大きな変化が生じ始めている。すなわち、かつては貧困の人々のスポーツで劣悪な環境の中で育ったからこそテクニックを持っていたと言われていた。しかし、最近ではサッカースクール的な環境でサッカーを教えられて育った選手が多くなってきている。きちんとトレーニングを積み、戦術も理解できる選手がトップクラスの選手として活躍し始めたのである。

次にブラジルに並び称せられるアルゼンチンを挙げねばならない。アルゼンチンのサッカーはブラジルより古い歴史を持っている。アルゼンチンは細かいボールタッチとコントロール力が最大の武器であり、そのような細かいボールタッチによってパス交換をするという特徴がある。

そして、1930年第1回W杯開催国ウルグアイであるが、ウルグアイはブラジルとアルゼンチンの間の緩衝国家として創られたと言われている。そして取り立てるほどの産業もなく、大きな世界史的な事件も起っていない。そんな国で唯一誇れるのがサッカーである。ウルグアイ人がサッカーを語る時、必ず枕詞に出てくるのが1930年のW杯のことである。それはウルグアイにとって歴史的事業と言うより国家にとって歴史上最大のイベントだったのである。

ウルグアイのサッカーは基本的にはアルゼンチンと同系統のサッカーである。頑強なディフェンダーにより相手の攻撃を跳ね返し、技巧または機知に富んだパスでカウンターアタックをかけゴールを獲得するというタイプである。ウルグアイはW杯初期のころ2回の優勝経験があるが、その後、時代の経過とともにアルゼンチン、ブラジルに水を開けられ、コロンビア、パラグアイに対しても優位性を失い、1995年地元開催のコパ・アメリカ（南米選手権）に優勝するまで国際的栄光から遠ざかっていた。

そして、近年大きな力を付けてきたコロンビアは黒人選手が多く、南米と言うよりむしろアフリカのサッカーに近いと言える。

（3）北中米・カリブ海サッカー連盟（Confederation of North, Central America and Caribbean Association Football : CONCACAF）

この地域ではW杯出場も過去11回と最も多いメキシコを上げねばならない。メキシコはインディオと呼ばれる先住民族を母とし、スペイン人を父として生まれた国と言われる。そしてメキシコの住環境は高地であり、その影響はメキシコ選手の体型に見られる。すなわち極めて分厚い胸板、しかも身長はあまり高くはない。そうした選手が重心を一層低くして長くはない脚を早いピッチで動かして走る姿、ボール扱いは独特なものを感じさせる。こうしたサッカーにはけれんみを感じる。このような先住民族独特のけれんみに違った味わいを与えているのがアメリカである。メキシコは地理的、経済的にもアメリカとの結びつきが強く、その影響は野球にも見られるごとくスポーツ界にも拡大されている。

次にスポーツ大国と呼ばれるアメリカであるが、アメリカのスポーツ観からすれば不合理性を持つサッカーは嫌われる種目でもある。すなわち、アメリカではスポーツというものは強い者、速い者が勝つのが当然であり、アメリカのスポーツは強い方が勝つようにできているとも言える。

不条理が支配する旧大陸から新大陸に逃れて、合理的で正義に立脚した社会を打ち立てようとした

サッカー研究 (1) サッカーの世界制覇とその要因

アメリカ建国の精神からすればこのような発想は当然のことなのかもしれない。

イングランドに生まれ、旧大陸ヨーロッパで育ったサッカーは、アメリカ的な発想とは逆なのである。サッカーの世界観ではボールを足で操るのであるからミスは当然のことであり、手でボールをキープするのはわけが違う。ボールはいつも相手のチャレンジに晒されている。かと言ってミスを減らすことはできるが、なくすことができないというのがサッカーというスポーツの原点なのである。しかし、アメリカ人にとってはそれが許し難いことなのである。こうした背景がアメリカにおいてサッカーというスポーツが主流にはなれなかった理由であろう。従ってかつてのアメリカではサッカーは典型的なエスニック・スポーツ（少数民族のスポーツ）だった。

W杯の歴史上アメリカは第1回のウルグアイ大会に参加したなど古い歴史があり、予選なしで出場できた初期のW杯では常連だった。その後地域予選が行われるようになるとメキシコのプロには勝てずW杯出場の機会は永いこと巡って来なかった。

最近のアメリカ代表は中産階級育ちの純アメリカ人選手や子どものころ海外のサッカー先進国で育ち、後にアメリカに移住してきた選手との混成チームとなっている。そして、アメリカのサッカーがさらに成長する契機となしたのは1994年のW杯（アメリカ）大会の開催である。そして1996年にはメジャーリーグ・サッカー（MSL）が開幕し、これによりアメリカ人選手のレベルは上がっていることは確実であるが、依然としてアメリカ人にとってサッカーが馴染みのないスポーツであることには変わりはないようである。

(4) アジアサッカー連盟 (Asian Football Confederation : AFC)

一口にアジア地域といっても東西に広く、また南北にも広い。現在サッカー界ではアジア地域は極東、東南アジア、南アジア、中央アジア、中東と5地域に分けて考えられている。

アジア (AFC) は、ヨーロッパ (UEFA)、アフリカ (CAF) に次いで多くの国がFIFAに加盟している。しかし、世界サッカーのレベルで見ると、アジア地域はまだ発展途上の域を出ず、特にワールドカップにおいては殆ど戦績らしきものは残っていない。FIFA加盟の時代的経緯をみても、現在でこそAFC、すなわちFIFAへの加盟国数は多いが、これも第二次世界大戦以後、さらに1994年ソ連の解体による中央アジアの5カ国の加盟によるものであり、これらの国は決してアジアのサッカーの歴史としては古くはない。

過去、アジア地域からW杯本大会に出場したのは、オランダ領東インド（現インドネシア、第3回1938年）、韓国（第5回1954年、第13回1986年、第14回1990年、第15回1994年、第16回1998年）、北朝鮮（第8回1966年）イスラエル（第9回1970年、現在はヨーロッパ連盟に加盟）、オーストラリア（第10回1974年）、イラン（第11回1978年、第16回1998年）、クエート（第12回1982年）、ニュージーランド（第12回1982年）、イラク（第13回1986年）、アラブ首長国連邦（第14回1990年）、サウジアラビア（第15回1994年、第16回1998年）そして日本（第16回1998年）の12カ国である。そして、複数回出場したのは韓国の5回が最高でイラン、サウジアラビアが各2回と現時点ではアジアの勢力はこの辺りが中心になっていると言える。

しかも1930年に第1回W杯が開催されて以来、アジア地域の代表チームがW杯で戦った試合総数は53試合あるが結果は4勝（北朝鮮1勝、サウジアラビア2勝、イラン1勝）11分け38敗の戦績しか残せていない。その原因として、アジアのチームは欧米に比べると身体的能力に劣っていることや強豪チーム同士が切磋琢磨する機会があまりにも少ないことが挙げられる。

サッカーの勝敗は経験が非常に重要な要因といわれている。それだけにチーム力を最大限に発揮できる経験の積み重ねによってレベルアップが望まれるが、現在は代表チーム同士の大会としてはW杯や年齢的制限を受けながらもオリンピック予選のほか、アジアカップ、アジア大会、アジアユース選

手権大会等が行われているにすぎない。各地域の国内においてはクラブレベルで国内リーグが行われているが、アジア地域の場合も各国のクラブチャンピオンが出場するクラブチャンピオンズシップ、カップウイナーズカップなどが行われている。しかし、他の地域ではクラブといえども地域連盟の主催するホームアンドアウェー方式による緊張したリーグ戦(Champions League)が行われているのである。アジア地域では地域条件(広すぎるなど)もあり、このような方式による試合も現時点では行われていないため試合数も少なく、国を代表するという意識にも異なりがみられる。

各大会の予選、カップ戦レベルでは短期間の強行日程で試合を消化することになり、チーム強化というより、むしろ対戦相手の対策的強化しかできないところにレベルアップにおいても効果的な結果を得ることができない原因がある。また、カップ戦の場合は必ずしも強いチームが勝利するとは限らないところにも難点がある。このような実状は必ずしもアジアのサッカーの強化にはなっていないのではないかという現状がある。

1966年第8回大会(イングランド)で北朝鮮がイタリアを破って以来、アジア代表は1994年第15回(アメリカ)大会でサウジアラビアが2勝しているがそれまで、28年間勝ち星が無かった。その後、1998年第16回(フランス)大会においてイランが1勝をあげ、かろうじて通算4勝ということになっている。

出場回数こそ5回とアジア地域でナンバーワンの出場経験を持つ韓国も予選リーグを含め未だ1勝もあげることができていない。1998年第16回大会(フランス)には日本も初めて出場を果たしたが予選リーグで3戦3敗の成績だった。近年アジアの中では極東の韓国、日本そして中東勢の争いが続いており、絶えずタイトル争いをしてきたのはサウジアラビア、イラク、日本、韓国である。1993年のW杯予選ではサウジアラビア、韓国、日本、イラクの順であり、1996年のオリンピック予選では韓国、日本、サウジアラビア、イラクの順であった。1998年フランス大会にはアジア代表として、サウジアラビア、韓国、日本、そしてオセアニアとのプレーオフの結果、イランの4カ国が本大会に出場している。

AFC加盟国数は多いが、実際アジア地域の代表の可能性を持つ国は前記の数国にしか過ぎない。世界では現在まだ発展途上と言われながらも、W杯出場を果たした経験のあるこれら韓国、サウジアラビア、日本、イラク、イラン等は今後も恐らくアジアでは常に上位を狙う国として世界的レベルで強化を図らねばならない。

出場回数として韓国に劣るがW杯で勝利数の一番多いサウジアラビアはアラビア半島の広大な領域を占め、石油生産にも恵まれて豊かな土地であるから一見大国の様相を示す。しかし、広大な土地を持つといってもその大部分は不毛な砂漠地帯であり、人口も2千万人にも満たず、しかも市民権を保持する人口は僅か千数百万人に過ぎない。人口的にいえば同じ中東地域の大国であるイラク、イランよりはるかに小国である。さらに国の歴史も古くはなく18世紀にアラビア砂漠中央部のナジド地方で台頭してきたサウジ家がオスマントルコの支配に抵抗しなから、長い時間をかけてアラビア半島を統一して作った国である。しかし、サッカーに関してはアラブ民族特有の個人技の高さがあり、そうした背景に加え1973年の第4次中東戦争後の石油危機の到来による原油価格の大幅な上昇により、いわゆるオイルダラーと呼ばれる外貨がサウジアラビアに蓄積されたことで先進国の優秀な指導者を招聘することにより強化された結果が現在のアジアにおける強国の基盤となっている。

また、イランのサッカーは協会の設立も1920年とアジアで最も古く、それだけにサッカーの実力はアジアナンバーワンとの評価がある。1968年から1976年までにはアジアカップで3連勝を果たし、1978年W杯(アルゼンチン)にはアジア代表としてスコットランドと引き分けた実績がある。その後、1979年のイスラム革命と、さらにイラン・イラク戦争の影響で一時的に低迷を来したが1990年のアジア大会(北京)で優勝し復活の兆しを見せ始め、アジアクラブ選手権のタイトルを独占した時期もある。

アジアのサッカー感覚を超越したとも言えるイランの強さは民族的に非常にヨーロッパに近いこと

サッカー研究 (1) サッカーの世界制覇とその要因

が原因だと考えられる。国土は砂漠、石油そしてイスラム教と中東のアラブ諸国と同一に考えられがちであるが、このような特徴はペルシャ湾の南側であり、実際にはアラブ人とペルシャ人とは全く違う人種である。しかし、19世紀以来ペルシャ半島は北側からロシア、南側からイギリスがそれぞれ進出してきた。ロシアは南への出口を欲していたし、イギリスにとってはペルシャ湾は植民地だったインドへの連絡路でもあり戦略的にも重要な土地だった。ロシアとイギリスの微妙なバランスの上にペルシャ（後のイラン）は植民地化されることなく独立国として残った。イランは砂漠の産油国だけの一面ではなく中東諸国にはない北側のカスピ海沿岸地方では農耕も営まれ湿潤な気候のもとに大森林帯が広がっている。モンゴロイドが東アジアの黄色人種を指すのと同様にコーカサス系、つまりコーカソイドとは白人の意味なのである。ペルシャ人はコーカソイドであるアーリア系民族なのである。イランという国名は「アーリア人の国」と言う意味で、つまりヨーロッパ人と同じ人種で周辺を取り囲むアラブ人とは異なっているのである。ペルシャは7世紀にアラブの侵入を受けてイスラムに改宗したが、その後、中東諸国と異なった少数派のシーア派の国となり1979年のイスラム革命でイスラム国家となった。したがって正式な国名は「イラン・イスラム共和国」(Islamic Republic of Iran)と言い、「アーリア人の地イスラム共和国」と言うことになる。このように、イランのサッカーが他のアジア諸国とはかなり色彩の異なっているのは、この国がモンゴロイドでもアラブ人でも無く限りなくヨーロッパのアーリア系民族に近いということにある。しかし、サッカーは人種、民族によって決定されるというより、むしろその国の人種、民族の持つ文化が決定すると考えるほうが得策であろう。すなわちイランはヨーロッパ的、コーカサス的なサッカー文化の国なのである。

次に、過去に実績を残していないが、今後アジアの強国に上昇する可能性のある中華人民共和国を取り上げる必要がある。世界最大の人口という潜在能力を持ちながら、その力を発揮できない中国は、「眠れる龍」と言われている。1930年代に始まった日本との長期にわたる戦争の過程でナショナリズムを覚醒させ、国民党、共産党の内戦を経て1949年に中華人民共和国が成立した。文化大革命などかきかすの内紛を経てようやく近代社会のスタートに立ったと言える。オリンピックやアジア大会におけるメダル獲得数で韓国や日本を凌駕する中国は、すでにアジア最大のスポーツ大国と言えるが、ことサッカーに関しては未だアジアの中でも実績が出せていない。しかし、中国がアジアでも脅威と見られるようになったのは最近のことではない。中国は台湾問題を巡って1955年にFIFAを脱退し国際舞台から遠ざかっていた。FIFAにはもともと台湾でなく中国（人民共和国＝北京政府）が加盟していたのだが、アジア連盟（AFC）が台湾（中華民国＝台北政府）の加盟を認めたのに反発して中国がAFC、FIFAを脱退した。その後、1974年に台湾サッカー協会をオセアニア連盟所属とすることで中国をAFCおよびFIFAに復帰させ、そして台北協会は中国台北（Chinese Taipei: 現在はAFCに加盟）の呼称とする方法をとった。したがって中国はFIFAを脱退している間は国際舞台から離れていたことになる。

復帰後の中国は1984年アジアカップでは決勝に進出、サウジアラビアに敗れはしたが、1982年のW杯（スペイン）予選でも最後まで代表権を争うほどの活躍を見せたり、1990年W杯（イタリア）の予選でも最終戦で出場権を逃している。つまり1980年代に入ってから中国はアジア諸国から将来の脅威と見なされ続けたにも拘わらず未だにW杯本大会への出場を果たしていない。

アジアでの優勝や世界サッカーの舞台に登場できないのは、一つには中央集権的強化方針にあると言われている。中国は近年、改革・解放路線を進めているが、これはあくまでも経済分野に限られ、政治的には事実上の共産党の一方独裁のままである。これに伴ってサッカー界の運営も中央集権的な色彩が強い。さらに、広大な土地を持つ中国は地域間の格差も激しい。言語も異なり、人々の気質も当然異なる。中国の場合、おおざっぱに分離するならば北方では長身でパワー系のプレーを得意とし、南方では身体的には小さな選手が多いがテクニック主体のプレーをする。かつてのソ連も他民族国家

であり、身体的には大柄でパワーを持ったロシア系とテクニク的なグルジア人の選手の混在により非常にレベルの高い力を持ったチームだったことがある。しかし、中国の場合、北と南では時として不協和音が聞こえて来る場合が多いのが問題である。したがって、これらがうまく混在し、強化策が軌道に乗ったときには恐らくアジアでもトップクラスの力となる可能性を秘めていると思われる。

サッカーは多様な選手が混在することにより良いチームができると言われるほど複雑なのである。ワールドカップという視点を中心にアジア地域諸国の戦績を見る限り、世界のサッカー界ではヨーロッパ、南米、アフリカ勢に遅れをとってはいるが、東南アジア、南アジアには元イギリスの植民地が多く、かつてはアジアの強豪だったし、現在でもサッカーに対する人気は強く、しばらく低迷気味であるが国自体が発展途上であり、政治的、経済的安定の暁には復活の可能性もある。

さて、日本にとって常に宿敵のライバルと言われる韓国であるが1950年から1960年代には各種のアジアでの国際大会に優勝し、アジアナンバーワンの地位を確保してきた。しかし、1964年のオリンピック（東京）大会を最後に世界の舞台から遠のいた時期があった。その後、1983年にはプロ・サッカーリーグが結成され韓国のサッカーは第2の黄金時代を迎えることになる。事実、1986年（メキシコ）、1990年（イタリア）、1994年（アメリカ）のW杯と3連続出場を果たしているのである。

韓国のサッカーは選手の自主的な判断力が優れているところに特徴があり、危険な状況を判断し、自分本来のポジションを離れてでも攻め上がったたり、カバーに動いたりもできる。これはサッカーではチームとして絶対的に必要な要素である。さらに韓国の選手は幾つものポジションをこなす能力を持っているので、監督もゲームの途中であっても戦術を代えることも可能になるのである。このような選手育成には独特の強化システムをもち、韓国では大韓蹴球協会に登録されている選手は、すべてプロや代表を目指すエリートなのである。その他の学校、実業団、プロ以外のチームは別組織である社会人体育協会に所属しており少数精鋭主義的強化策がとられている。

一方、サッカーは韓国の国技的見方が一部でなされるが、国内でのスポーツに対する人気度では圧倒的に野球に人気がある。しかし、対日本戦になると韓国民は一様に熱狂する。テレビ視聴率も50%を越えると言われる。このことは韓国でサッカーの人気を支えているのはサッカーが国際大会で勝てる競技であり、さらに日本に勝てるスポーツだからと考えることができる。

次に日本のサッカーは1960年代の東京、メキシコ両オリンピック当時サッカーブームと呼ばれる社会現象がみられたが、当時はまだオリンピック至上主義、アマチュアリズム全盛の時代であり、その後も実業団チームの日本サッカーリーグが日本サッカーのトップであり続けた。しかし、その実業団リーグも次第に企業の仲良しクラブ的存在になり安全第一、冒険のないぬるま湯的になり代表チームもW杯どころかオリンピックにも参加できない状態に陥るのである。この当時すでに国際オリンピック委員会（IOC）は各種競技においても世界のトッププロをオリンピックに参加させようと躍起になっていた。事実、サッカーでも1984年ロスアンゼルス大会以後プロが参加しており、現在ではオリンピックのサッカーは事実上23歳以下の世界選手権大会となっている。

日本では1993年よりかねて懸案であったサッカーのプロリーグがスタートしたのであるが、それまではプロの団体競技としてアメリカ生まれの野球しか存在しなかった。新たにヨーロッパで盛んなサッカーのプロリーグ（Jリーグ）が誕生したことは社会的にも大きな関心を集め、このJリーグのスタートは日本のスポーツ界にとっても、世界のサッカー界にとっても大きな出来事であった。しかし、プロリーグ誕生の効果が明確に得られたのかについては、リーグ誕生後の歴史的経験も些少であり解答は得られていないと思える。しかし、プロ化によりそれまで経験できなかった世界のサッカー情報あるいは思考形態に関しては徐々に変化しつつあると考えられる。

サッカーは確率のスポーツと言われる。すなわち勝つ、負けるということで100%、0%と言うことはあり得ないのである。言い換えるならばサッカーほど番狂わせの起こるスポーツは他に見当たらない。

サッカー研究 (1) サッカーの世界制覇とその要因

い。それは一つにはサッカーがロースコアのスポーツであるからである。1996年のオリンピック（アトランタ）大会の対ブラジル戦では1-0で日本が勝ったが、日本とブラジルの実力差からすれば当然勝てるとは思えないと考えるのが日本人的思考形態なのである。このような事象は、逆に日本とは格差の下チームに日本が敗れることもありうるということを意味しているのである。日本では未だこのようなサッカー的確率論思考が浸透していないと言える。さらにW杯出場に関しても出場不可能100%はあり得ないのであり、もし確率は低ければそれを少しでもアップしようとするのが思考形態として必要になる。

日本のサッカーには長い歴史があるが、一般国民のレベルでサッカーに関心が集まるようになってからの歴史はまだ浅い。一般国民にサッカー的思考が身についていないことは当然のことかもしれない。さらに日本のサッカーには独自のスタイルがないと言われる。たしかにイタリアにはイタリアのスタイルがある。イングランドにはイングランドの、ドイツにはドイツのスタイルがある。しかし明確なスタイルを持っているのは伝統国だけである。伝統とは経験の積み重ねによって得られるものであり、その点からは日本の場合あまりにも経験が少なすぎる。

このように伝統国に比してサッカーの歴史が浅い割には日本のサッカースタイルははっきりしているとも言える。韓国と比較するときそれが明確に識別することができる。日本選手は足元でのボール扱いの器用さで韓国選手を凌ぐと思われるが、足腰の強靱さでは韓国が上位と見ることができ、テクニックの日本とパワーの韓国とでもいうことができる。しかし、これがそれぞれの国の持つ特徴とすれば、このスタイルを世界的伝統国と戦いながら経験を積み重ね、伝統と言われるスタイルが構築されてゆくものとして考えることができる。

(5) アフリカサッカー連盟 (Confederation Africaine de Football : CAF)

エジプト、モロッコまでの地中海に面した北アフリカは1970年代以来W杯では活躍している伝統国であるが、1980年代には急激に力をつけ活躍したのはサハラ砂漠以南のいわゆるブラックアフリカのカメルーン、ナイジェリアである。走力、ジャンプ力、強烈なキック力や柔軟な身体と足の動きなど黒人の特有な身体能力の高さを充分生かしたサッカーはそれまでヨーロッパには無かっただけに他の地域諸国にとってはやりにくい相手になった。

戦術、戦略的には未だ未熟でありW杯のごとく1カ月もの長期にわたる大会ではコンスタントな力を発揮するにはまだ時間がかかりそうであるが、いずれにしてもサッカーのレベルは近年向上していることは確かである。ただ、貧困が大きな問題となって、若い優秀な選手の多くはヨーロッパのクラブに移籍してしまう。しかし、CAF連盟は代表チーム同士のネーションズカップやクラブ・チームによるチャンピオンズカップ、カップウィナーズカップやW杯予選の試合日程などが何年も先まで決まっているほど良く機能している。このようにCAF連盟は比較的良く組織され、ヨーロッパのクラブにとってはアフリカは選手の供給源であり、その他植民地時代の旧宗主国との関係やUEFAとの協力でヨーロッパとの交流のパイプは太い。

以上述べたように地域大陸間ではさまざまな地域特性を見せながら発展したサッカーも、昨今では社会的環境の発展、すなわち航空機の発達、選手の外国への移籍、情報化社会によるマスメディアの発達により各地域の持つ有利な特徴をそれぞれ導入、活用したサッカーが近代サッカーとして世界で行われているのである。こうした傾向はますますサッカーを高度化させ、地域、国による異なりをなくし、単なる技術的レベルでサッカーを分析することが不可能な状況になりつつある。

第5章： 世界的規模への発展要因

人間の歴史上数あるスポーツの中でサッカーほど多くの文化圏で行われ、多くの人々が興じ、多くの人々が観戦するスポーツは他にはない。ボールを蹴り、相手ゴールを奪うことによる、むしろ単純ともいえるゲームがなに故にここまで世界的に普及し、発展したかを検証する必要がある。

サッカーの長所のうち最も大きな特徴は単純さであると考えることができる。先ずゲームを行うにはボール1個とゴールとして目印になる物さえあればゲームが成立するのである。ゲームを行う場所はさほど問題ではない。すなわち中世イングランドで行われていたフットボールに原点を戻せば多少の空き地、路地裏、歩道、何処でもゲームを行うことができるということである。そしてプレーする当事者は一流のスタジアムで行われる代表チーム同士のゲームと同等の興奮と満足感を達成することができるところが一番大きな特徴と言える。さらに、この単純さに加えてゲーム自体が技量の如何に拘わらず成り立ち、そしてそれで人々が満足できるという事実がサッカーの世界的人気を高める要素として考えることができる。

次に、この単純さを守り、誰にでも理解しやすいゲームであり続け、現在に至っているのは社会状況やゲームの内容がどのように変化しても改正を一切拒否し続けてきたルールが存在である。このようなサッカーの持つ硬直性は世界的に定着する上では不可欠の要因であったことは疑いのない事実である。19世紀末の時点で実施されたサッカーのルールは17条であったが、今日でも相変わらず17条に変化は見られない。すなわち(1)競技場(2)ボール(3)選手の数(4)選手の用具(5)レフェリー(6)ラインズマン(現在ではアシスタントレフェリー)(7)試合時間(8)試合開始(9)ボールのインプレーとアウト・オブ・プレー(10)得点(11)オフ・サイド(12)反則と不正行為(13)フリー・キック(14)ペナルティ・キック(15)スロー・イン(16)ゴール・キック(17)コーナー・キックであり、1938年に一部条項の配列に変化が見られたが、これとて実質的な改正というよりルールをより一層实际的に運用するため順序を入れ替えたに過ぎない。すなわち、サッカーのルールは試合の戦術面に全く言及しているわけではなく、試合のやり方に影響を及ぼす条項があるとしたら1925年に現行のルールに改正された11条のオフ・サイド条項のみである。他はすべて試合の構成ないしは試合中に不当な事態が生じたら、その際の措置に関する条項で構成されている。つまり、サッカーのルールは試合開始前に行うことと、試合が開始されてから行ってはならないルールで構成されていることが分かる。

このような単純なルールでスタートしたサッカーは時代の経過とともに、選手はこのルールに基づき新しいフォーメーションを構築したり、試合を行うにあたり攻撃的、守備的などの戦術的变化も、この簡単な融通性に富んだルール内に納めて戦っているのである。各種スポーツのルールには不平等性を伴うような状況が時として見られるが、サッカーの場合は統一的ルールにより行われていることによって、各地域においてルールで許された範囲内で異なった内容のサッカーが行われたりするところにも特徴が見られる。

次に世界的規模への拡大の要因としてサッカーを行ったり、観たりする人間の側について考察する必要がある。

もともと球技は古代ローマ時代にも存在^(注3)したと言われているが、当時はあまり熱心に行われなかった。人間が人間以外のものと闘うという図式はかなり古い時代から存在していた。古くは狩猟の時代から言うことができるが、狩猟でも時代の経過と共に人間の知的向上の結果、それが共同作業という形態を成立させ、そこでは狩猟のための戦略を求めたり、危険を冒して罠を仕掛け、最終的には獲物を捕獲するという図式を作り出したのである。この図式は、とりわけスポーツとしてのサッカー的要素を實に見事に見出すことができるのである。

しかし、狩猟と採集の生活を送った後、獲物を捕獲し、そして野生の果実や穀類を探し求めるより

もこれらを飼育したり、栽培したほうが得策であることに気づき、農耕民として生きることになるのであるが、この農耕形態の単純な日常性は必ずしも人間の闘争本能を満足させるものではなかった。ここに登場するのが古代ローマ人により建造されたコロセウムの名で知られる巨大な円形闘技場である。自らが行うことなく観るという立場で狩猟という闘争本能を満足させることになるのである。しかし、人間と動物の闘いに違いはないが狩猟時代と決定的に異なることは生きるための狩猟ではないということである。この同種の円形闘技場はローマ帝国時代には70を越える多くが建造されたのである。この闘技の遺産として今日でもスペインの闘牛のような形で受け継がれているが、それとてサッカー試合の人気には届かないかもしれない。また、人間と動物の関係からみるならば、現在ではスポーツの一種としてハンティングの形として生き残っているとも言える。しかし動物愛護の観点から動物虐待はやがて姿を消すことになる。それと共に人間の生活も次第に変化し田園から工場への巨大な人口流入が始まり、都市に居住する賃金労働者が生まれてくることになるのである。

このことはスポーツにとっては画期的なことと言えるし、これまで流血をとめない、動物を束縛したスポーツが終局的に衰退し球技の時代が登場するのである。イギリスのパブリックスクールでさまざまな形のフットボールが奨励されるようになり、さらに学校競技になるにおよんで体系化されたが、まだ統一化されたわけではなかった。しかし、フットボールがサッカーとラグビーとに大きく2分化されたことは既に述べたが、その一極をなすサッカーには遠く狩猟時代の人間の持つ本能的要素を兼ね備えていると言えるのではないだろうか。すなわち試合に先立ち戦略が練られ、試合中に作戦が展開される。そして象徴的な得点を得る（獲物を獲得する）ためには仲間の積極的な協力が必要となる。しかもボールを扱いプレーするには最高の体力が必要となる。さらに長時間にわたって活動するには相当の持久力も必要となる。ボールコントロールは技能の高度化によって完璧となり、一連の動きの次の動きが予測できないことから瞬間的に次の動作に移れるイマジネーションが必要となり、こうした動作が効果的に行われるためには相当の精神力が必要とされ、緊張の瞬間には冷静さが要求されるのである。そして最終的にゴールを狙ってシュートを打つには特に正確な照準能力が必要となる。

ほとんどのスポーツには、このような人間が本来身につけてきた運動要素を留めていると思えるが、種目によっては身体的活動要素が欠如していたり、危険性から離脱していたり構成員相互の協力性に欠けていたりする。しかし、ことサッカーに関しては完璧とまで言えるほどその名残を止めているのである。観衆にとっては本来人間の持つ本能の代理行為という形で楽しむ以外にないのであるから、こうした狩猟的要素の提示が多いスポーツほど興味を覚えるのである。

さらに、サッカーの試合には必ず戦争に似た要素があり、これが必然的に試合に興奮を添えるものであることは否定できない。試合が終了すれば必ず勝者と敗者が存在するが、戦争と言っても相手を倒すことが目的ではないことはレフェリーの存在があることから理解できる。相手はボールとゴールの間に存在する障害物であるが、これを排除するために故意に傷つけたり、能力を低下させる行為は当然処罰の対象になる。ルールという規範の中で人間の持つ闘争意欲をコントロールすることができるようにスポーツが存在し、サッカーの場合、相手をだまし、相手にミスをさせそこで自分の優位性を示すことができるのである。

さらに人間は誰でも日常生活において欲求不満を抱き、常に鬱積した怒りを抱えている。そして蓄積し、内部で煮えたぎって爆発する機会を待っているのである。サッカーは人間の攻撃性が刺激されこそすれ和らげられるとは考えられないが、攻撃性とは襲撃を受けたときの反応的な衝動であり、これが生得の防御行動として身についているのである。プレーヤーも観衆も試合終了の笛の合図により勝者は勝利感による優位性と試合から受ける攻撃衝動の消滅を味わうことができるが、日常的に蓄積されたストレスの解消にはならないのである。敗者側の場合は全く逆の状態が生じる。すなわち試合によって増幅された怒りは試合が終了しても一向に解かれないうままになる。しかし、こうした怒りは

次第に抑圧され、長続きせず、いずれ落胆という形で落ち着くものである。平坦的に言えば喜んだり、落胆したりして、さらに次の機会にどのような結論を得ることができるのかと言った期待感を抱くことができる場所に楽しみとしての要因がある。

特に諸外国のサッカーは地元の地域産業開発と密接に結びついている場合が多いので、地域社会との間に強力な一体感が存在する。したがって、ホームチームが勝利した場合は心理的優位つまり社会的地位の向上を享受することができるし、競技場での勝利は地元産業にとっても勝利を意味することになるのである。サポーターの大半を占めるであろう地元労働者が地位の向上を感じ取ることにより、作業能率の向上および地元経済の好況という形になって現れる。したがって選手、サポーターともリーグで降格することは最も大きな脅威となり、常に上位を狙いチームを向上させる努力を惜しまないものである。

以上述べたようにサッカーが世界規模で普及した幾つかの要因を考えることができるが、一方では嫌われる要因も確かに存在する。例えばフーリガン現象^(注4)などがその一例である。しかし世界のいたるところでゴールを目指す必死のプレーの中で、監督、コーチがいらだちながら激励を送り、戦術的な指示を選手に与える。そして、敵ゴールを攻め落として飛び上がって互いに喜び抱き合う勝ち誇った選手たちの姿を見ることができる。その光景を真のスポーツマンシップ隆盛のころスポーツに親しんだ人と軽装の若いファンが自分達とはかけ離れた存在のスタープレイヤーに向かって声を限りに声援する姿がある。この光景は非常に不思議なほど隔絶していながら同じ場所で、同じサッカーの試合を観戦しているという奇妙な共通点がある。これがサッカーと言われるスポーツなのである。

注釈

注1： サッカー(Soccer)という呼称はアソシエーションフットボール (Association Football)の俗称であり、世界的にはフットボールという。しかし、本稿においては中世イングランドにおけるフットボールと区別する意味で、あえてサッカーの呼称を使用した。

注2： 1992年ベルギーのプロサッカー選手・ジャンマルク・ボスマンがUEFAと自国サッカー協会相手に損害賠償を求める裁判を起こした。提訴理由は「契約満了後も選手を拘束するサッカー界のルールが、プロ選手としての活動を妨害し損害を与えた」すなわち契約満了後に次のクラブとの契約を交わそうとしたところ、移籍先と移籍金で折り合いがつかずクラブは移籍を拒否したのである。ボスマンは訴訟を起こしたが、これに対してベルギー協会は資格停止処分にした。ボスマンは提訴を取り下げ別のクラブへ移籍したが、その後、UEFAとベルギー協会の定める「移籍規約」が違法であるとの訴訟を起こしたものである。これに対して欧州司法裁判所は1995年に「EU内を労働者が自由に移動する権利」を保証する「ローマ条約」を根拠に全面的にボスマンを指示した。この結果、EU圏内、18サッカー協会の中では、契約満了後のプロ選手は完全なフリーとなり移籍金を伴わずしてそれまで所属していたクラブから他のクラブへ移籍できることになった。

注3： “フットボールはローマ人によってイングランドに紹介されたわれわれの最も古いスポーツである”とウィリアム・アンドリウス(William Andres)が述べている。その根拠となるのはイタリア人の医事評論家メルキュリアリ(Mercuriali)の『De Arte Gymnastica』(1569)に由来している。古代ローマ人はハルパスツム(harpastum)というゲームを行っていて、それが1569年頃のイタリアで行われていたカルチョ(calcio: イタリアではフットボールのことを言う)と同一のゲームであると述べている。そのほかにも、ローマ人はピラ・パガニカ(pila paganica) (英訳: Village ball)というボールゲームを持っていた。しかし、ボールゲームではあるがこれらがイングランドのフットボールに結びつくかは不明である。

サッカー研究 (1) サッカーの世界制覇とその要因

注4： 中世イングランドのフットボールの項で当時のフットボールと呼ばれるものが、決して現在の規則に則って行われるようなものではなかったことは述べたが、この頃のフットボールとの根本的な異なりはゲームの目的そのものである。すなわち勝ち負けが目的ではないのである。要するにイングランドで中世に行われていたフットボールは群衆となり一つのボールを奪い合って遊ぶお祭りのなものとして考えれば、先に述べたゲームの方法などは理解できるのである。イングランドのサッカーは意識的であろうと無意識であろうと20世紀末を迎えてもこうした中世の祭りの感覚を引きずっていると言える。このような背景があってフーリガン達の行動様式もまた中世のモップ（暴徒）フットボールの行動様式に則ったものであると考えることができる。

参考文献・引用文献

- ジュール・リメ著 川島太郎、大空博訳 牛木素吉郎監修『ワールドカップの回想』ベースボールマガジン 1966.
- 棚田真輔・五島祐治郎共著『神戸ア式蹴球奮闘史』神戸スポーツ研究会 1991.
- 日本蹴球協会編『日本サッカーのあゆみ』講談社 1974.
- ベースボールマガジン社編『激動の昭和スポーツ史9 (サッカー編)』ベースボールマガジン社 1989.
- デズモンド・モリス著 岡野俊一郎監修 白井尚之訳『サッカー人間学』小学館 1983.
- 後藤健生著『世界サッカー紀行』文芸春秋 1997.
- 日本サッカー協会編『75年史』ベースボールマガジン社 1996.
- F.P. マグーン、Jr著 忍足欣四郎訳『フットボールの社会史』岩波書店 1985.
- 多和健雄、長沼健、永嶋正俊著『サッカーのコーチング』大修館書店 1981.
- Dennis Signy 『A Pictorial History of SOCCER』 London 1968.
- 新田純興・福島玄一・多和健雄・村岡博人著『図説サッカー事典』講談社 1971.
- 鈴木武士著『ワールドカップ物語』ベースボールマガジン社 1997.
- 後藤健生著「サッカー熱に凝縮される国民性と気質」『朝日ジャーナル』Vol.24-30 1982.
- ブライアン・グランヴィル著 田村修一・土屋晃・田邊雅之訳 賀川浩監修『ワールドカップ全史』草思社 1998.
- 後藤健生著『ワールドカップ』中央公論社 1998.
- J. リーヴァー著 亀山佳明・西山けい子訳『サッカー狂の社会学』世界思想社 1996.
- 大住良之著『サッカーへの招待』岩波新書 1993.
- 後藤健生著『サッカーの世紀』文芸春秋 1995.
- 大島裕史著『日韓キックオフ伝説』実業之日本社 1996.
- 松岡完著『ワールドカップの国際政治学』朝日新聞社 1994.

